

故 池上義信先生の思い出

河 辺 広 男

出 会 い

私が新潟市立中学校に入学したのが、1940年4月でした(12才)。当時は夜間中学だった(現在の明訓高校)の校舎に同居していたのですが、生物班というクラブがありました。そこで池上先生(当時30才)にお会いしたのですが、不思議なことに、当時の経緯は記憶に残っておりません。1年ほど経って上所島に新校舎が出来て移転したのですが、生物準備室という室があって、皆川さんという夜学へ通っている親切な助手と2人で仕事をしておられました。授業が終わったあと、毎日、そこへ入り浸っていた記憶があります。当時は、生物に関する写真や図鑑の類はほとんど無く、蔵書も貧弱なものでした。

私は当時、鳥の観察にのぼせていましたが、生物一般にも特に関心がありました。池上先生から生物の教科書を貸していただいて、毎日読んでいました。確か、1年から5年までの教科書を1ヶ月位で読み上げるほどのスピードだったと記憶しています。何よりも鮮明に覚えているのは、植物採集の面白さとか、増水した沢を渡った話、岩陰で標本用の新聞紙にくるまって野宿した話、勉強家だった南方熊楠にまつわる逸話とかを面白おかしく話していただいた事などでした。正式な講義でも、蛙の画を黒板に描いて面白く説明されてました。なんて博識なんだろうと感じていた次第です。今でも覚えているのは“勉強と研究は違うんだ、研究とは、誰も知らないことをコツコツ確かめることなんだ”と、いつも云っておられたことです。勉強家だった先生は、1日3時間眠れば良いので、あとの時間は勉強に当てていると話されました。私もその真似をしてみました。が、3日も続きませんでした。私は、当時、生物学者になろうと決めておりましたので、当時珍しかった顕微鏡を使わせていただいたり、野外実習と称して放課後に友人と連れだって、信濃川湖畔の農地、湿地で採取した思い出があります。帰宅する時も、わざわざ遠廻りして田舎町や鳥屋野潟周辺の湿地を通して、ヨシキリ、バン、モズの巣を覗いたり、亀を捕ったりして帰りました。

個人的なおつきあい

そんな日常の中で、いつも風呂敷に書類を包み込んで通っておられた池上先生の下宿(学校の近くにあった)へ遊びに行くようになりました。13才頃の私と兄貴か父親のような年代の先生の友情?か親子の情とでもいえる関係でした。月1回位の個人的なお付き合いが勤労動員で横浜へゆくまで3年近く続いたこととなります。下宿では、学校にいる先生と違って、いつも細かな字で植物(蘚苔類)の

文献や図の筆写をしておられました。時間に追われているとでもいえる努力家でした。蘚苔類の研究者は日本では数えるほどしかいないとか、服部研究所の立派な仕事は、個人のポケットマネーで運営されているのだとか、学校では聞けない話などしていただいて、大変感銘を受けたものでした。こんなことも後で私が水俣病(水銀の環境汚染)の研究に自費で取り組むようになったことと関係があると思っています。夜遅く、帰る時間になると、送って行こうとって話しながら約3kmの道を歩いて下さいました。

勤労働員の思い出

池上先生は“仏の池上”とか“ベアー(熊)”とか渾名されていて、大変温和な方で、横浜へ勤労働員に行かされた私達の付添いとして2~3ヶ月交替で教師が寮の玄関近くの一室に住んでいたのです。

ナンキンムシ・コナダニ・ノミ・シラミが無数に住む宿舎に住まわれたのですが、不平らしき言葉も無く、読書と筆写に明け暮れておられました。私はどちらかといえば猪突猛進型でしたが、裏山の畑で夫婦と仲良くなって、花などを買って室に飾ったりしていました。寮長(海軍下士官)は、それを“めめしい”とかいって嫌っていました。この下士官は、特に依怙最頂のひどい人で、気に入った寮生を特別に待遇して、嫌いな寮生を殴ったりしていました。私はよくこの寮長と喧嘩をしたものでした。しかし“私にだけはどうしたことか手を合せなかったようです”一度などは、河辺に味方する奴は一步前へ出るなどと言って、みんなを並べて脅かしたものです。しかし、その時、みんなが一步前へ出たので事なきを得た記憶があります。

こんな時でも、池上先生はじっと耐えておりました。一度、腹が減って、裏山でヤマイモのムカゴを沢山採ってきて、池上先生に“食べられますか?”と聞いたことがあります。苦いから食べない方が良く言われて捨てたことがありました。最近では茹でて結構食べられているようです。

中学卒業・医専の学生時代

池上先生は私達が中学卒業~動員解除頃(1945年以降)に結婚されたのではないかと思います。私も新潟で学んでいたもので、以前ほどではありませんが、何か相談して欲しい時とか、時間があつた時などに春日町の住宅(確か市営住宅だった記憶があります)へ同っては、一晩じっくり話を聞いてもらったりしました。相変わらず筆写を毎日続けておられました。1950年以降は、私も新潟を離れたので、それ以降は年に1~2回訪れる程度でした。この頃にな

ると、もう時効だと思われたのでしょうか、中学時代の職員会議での私をめぐる議論とか、同僚教師の戦時中の言動とか、勤労働員の話とか、私達には判らなかつたいろいろな話を控え目ながら話して下さいました。過去のことをよく記憶している方だなあと感心したものでした。

最 後 に

結局、私は先生の頻繁な採集旅行や冒険にお伴したことはありませんでしたが、峰越え林道、津川の赤崎山へ御一緒させていただいた2回だけでした。風呂敷と新聞紙を持

たれて、ゆっくりとあちこち観察して採集される様子を、非常に感銘深く思い出しております。暗くなっても平気で採集に没頭されており、視界が利かなくなってから、大急ぎで山を降りるなど、景色を眺めての常人の登山とは違った態度を覚えております。

最後に、御子息純一さんが、通夜の席だったかに話された言葉に、“父は自然を神として信仰しており、観察、研究に没頭していました”とありましたが、私もそれと同感ですし、私の理想でもありました。

いつまでも教導いただきたかった、尊敬する教師でした。

池 上 先 生 と の 採 集

川 端 義 一

縁あって福島県只見町の植物調査に一員として参加させてもらいました。池上先生も調査員に加わっておられ、何回か只見に同行させていただきました。その折りの話です。

1997年6月28日、朝、先生のお宅に伺い、先生に車で只見までご一緒いただきました。六十里越経由で、集合の約束の時刻があったので途中止まることなく集合場所まで走行しました。この時、先生は途中興味を引かれた所もおありだったのに採集できなかつたことを残念に思っておられたのでしょうか、後日、じねんじょの総会の折りに、最近はずでさっと通り過ぎて周りの植物を見たり採集したりしない、というような話をされ、身の縮む思いで聞いたことがありました。その日は只見で何か所か採集やら調査やらをし、只見に泊まりました。

先生は当時、一度に多くを召し上がれないので少しずつ時間をかけて食事をされていました。翌29日の朝も同様で、我々も傍らで話を伺っていましたが、結局、食事を終えられる頃には昼になっていました。その後、新潟へ帰ることになり、また同乗していただきました。

途中田子倉湖の一方所で、どちらが言い出したのかさだかではありませんが（たぶん先生が止まれとおっしゃるこ

とはなかつたと思いますから、私が言い出したのでしょうか）、車を止めて採集をしました。

斜面に送電鉄塔保守用の道がつけてあり、階段がつくってありました。先生は下で採集を始められたのですが、いつも通り遅々として前進されません。先生の体調を考えると先生は登られずに下で採集されるものと勝手に考え、私は保守用の道を登って、斜面や尾根の林を調べていました。調査を終えて下っていくと先生はまだ下で採集をされておられました。下の林や別の斜面の林を調べ、しばらくして、先生がおられた所へもどってみると、先生は山道を登っておられるではありませんか。心配なこともあり、再び先生と共に登り始めました。結局、先生は途中で引き返されることもなく、ゆっくりながら、尾根まで登られました。

さすがに下りてきた時にはあたりは暗くなっており、先生を促して帰路につきました。新潟のお宅に着いたときはずいぶん遅くなっており、奥様は穏やかに迎えてくださったのですが、内心ずいぶん心配されておられたと思います。大変恐縮しました。

この採集が先生との最後の採集になってしまいました。

池上先生の御指導に感謝して

小 林 巳 葵 彦

1968年3月23～24日に積雪数mの小千谷山本山でのじねんじょ会採集会が開かれた。24日に山頂から下山中の屋食場所で、「この雪の下にユキツバキがあり葉状苔がある」との池上先生の一声で、好奇心旺盛な若者が、3mほど掘り進むと蕾をつけ春を待っていたユキツバキが現われ、葉状苔が付着していた。池上先生には、雪の下まで見通す眼力が備わっているのだろうかと思嘆するが、その後の調

査やお話の中に、人間離れた？素晴らしい能力や発想力を感じるが多々あった。先生の話には、終わりが無く常に夢が広がり、いろいろな繋がりがネット状に展開する。そして気付いた時には先生の話にのせられているというか、しなければならぬ雰囲気になっていた。しかし結果として、時間が経過すると自分の能力不足を感じるが多かったが、先生の幅広く奥の深い知識に裏打ちされた